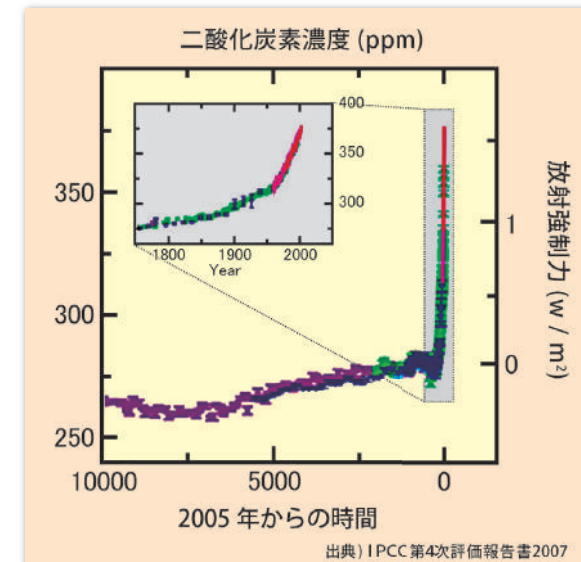


これからは気温上昇を2℃未満に抑えることがポイント

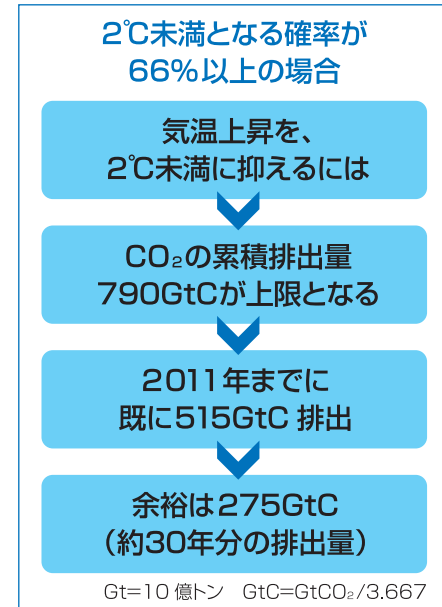
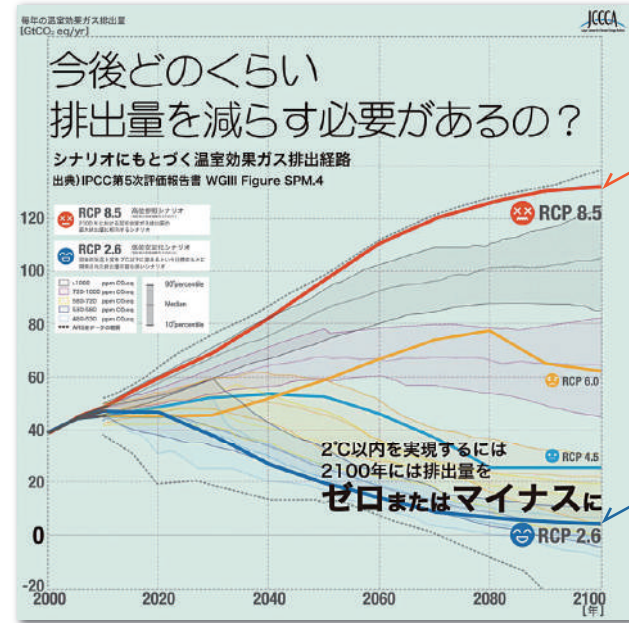
大規模な温度上昇は、地球規模での環境に大きな変化をもたらすため、産業革命以来の温度変化を2℃未満にすることが推奨されています。2℃未満を実現する可能性の高いシナリオは、2100年に大気中の二酸化炭素換算濃度を約450ppmとしています。このシナリオでは、2050年には世界全体で2010年と比べて、40~70%の温室効果ガスを減らして、2100年までにはゼロまたはマイナス*の排出量にする必要があると言われています。

*植物などによるCO₂固定や、発生したCO₂を地中に埋めることによってマイナスにする。

▼氷床コア観測と現代の観測による二酸化炭素の大気中濃度



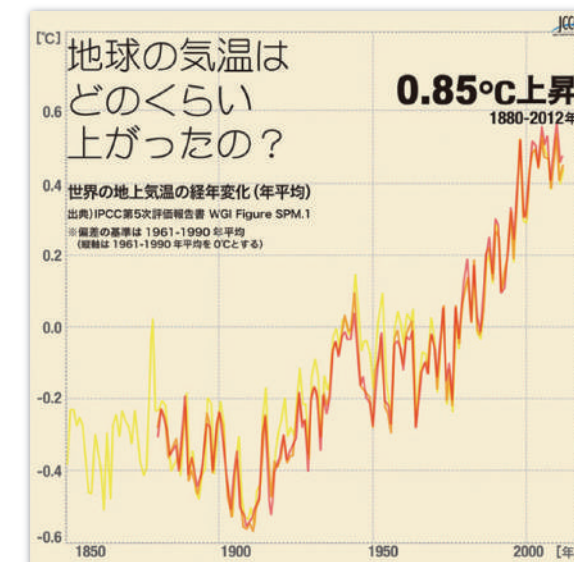
二酸化炭素の濃度は産業革命のころは約280ppmでしたが、最近では約400ppmが観測されたという報告もあります。増加率は40%を超えています。



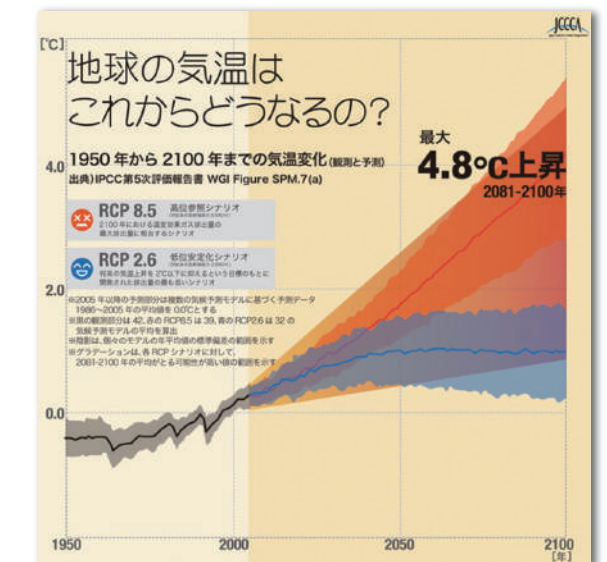
地球温暖化と私たちの暮らし

最近の異常気象や高温化現象など、地球温暖化に起因している気候の変動が私たちの暮らしに様々な影響を及ぼしています。最近IPCC*から6年ぶりに温暖化の影響などについて第5次評価報告書が公表されました。

人間活動が温暖化の原因である可能性が極めて高い!と報告されました。



1880-2012年の期間にかけて0.85℃上昇



現在(1986-2005年)と比較して2100年には最高4.8℃上昇すると予測

*IPCCとは気候変動に関する政府間パネル(Intergovernmental Panel on Climate Change)の略称。人為起源による気候変化、影響、適応、緩和の方策について、科学、技術、社会科学の面から評価を行うために1988年、世界気象機関(WMO)と国連環境計画(UNEP)が設置した組織。科学者の気候変動に関する研究成果をまとめて、問題解決に必要な政策を示している。

緩和策と適応策がこれからは重要!

地球温暖化防止への対策は、地球温暖化の原因となる温室効果ガス(CO₂)の排出を減らして、大気中の温室効果ガス濃度を安定させる「緩和策」と、気候の変動やそれに伴う気温・海水面の上昇などに対して人や社会、経済のシステムを調節することで影響を軽減しようという「適応策」があります。これからはこの2つの対策を合わせながら温暖化対策に取り組んでいくことが重要です。具体的な取り組み例としては、以下があげられます。

- 緩和策 省エネの取組みや、再生可能エネルギー、CO₂の地中貯留の普及、植物によるCO₂の吸収源対策など
- 適応策 渇水対策や農作物の新種の開発や、熱中症の早期警告インフラ整備など

埼玉県地球温暖化防止活動推進センター / 認定特定非営利活動法人環境ネットワーク埼玉

〒330-0074 さいたま市浦和区北浦和5-6-5 埼玉県浦和合同庁舎3階

TEL: 048-749-1217 FAX: 048-749-1218 E-Mail: info@kannet-sai.org

ホームページ <http://www.kannet-sai.org/>

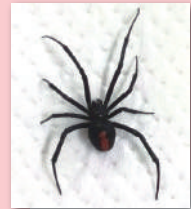
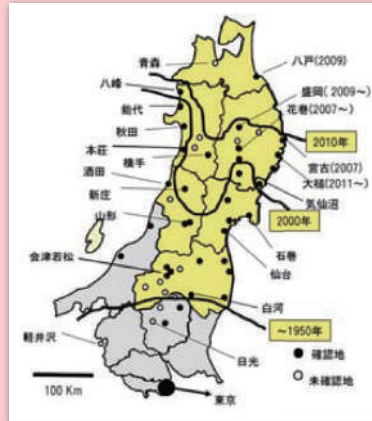


環境省「平成26年度 地域における地球温暖化促進事業」で作成しました。

地球温暖化は、世界的規模の影響だけではなく、私たちの身近な地域でも様々な影響が見られます。

●感染症が心配されています

気温の上昇により、熱帯の生きものが日本でも生息することが可能となっています。ヒトスジシマカを媒介とするデング熱や毒グモのセアカゴケグモが埼玉県でも確認されています。



セアカゴケグモ
オーストラリア原産の体長1センチメートル程度の毒グモ。県内でも平成26年に確認されています。
出典：埼玉県みどり自然課



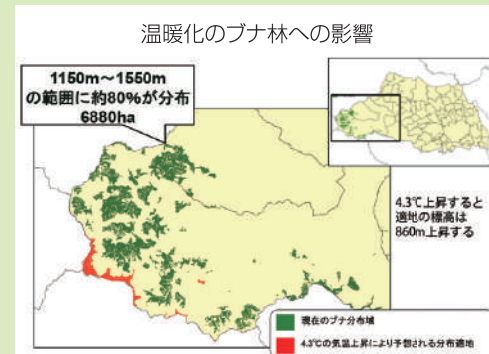
●スーパー台風、ゲリラ豪雨、大洪水などの異常気象が頻発しています

最近の大型台風や夏のゲリラ豪雨など、異常気象といわれる気候が出現しています。大雨が降ると山地では斜面崩壊も起こり、土砂崩れや土石流による建物の崩壊など被害は甚大です。



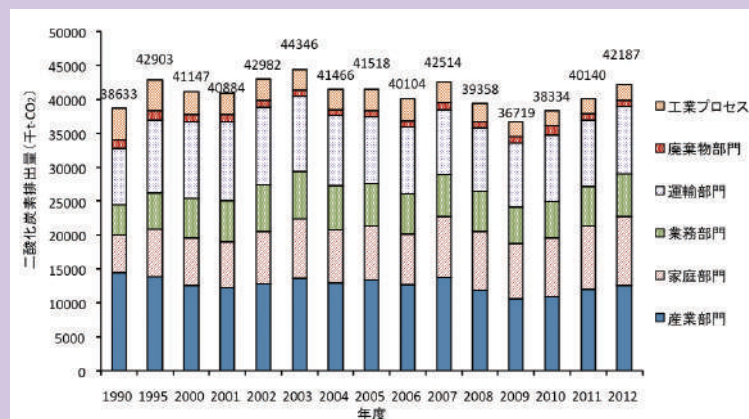
●自然生態系への影響が心配されています

気温が上昇することによって、生態系にも影響が現れています。例えば奥秩父のブナ林は気温が4.3℃上昇すると、ブナ林の適地は860m上昇することになります。適地が狭まり、将来的にはブナ林が衰退する可能性もでてきます。そして、水源涵養保安林の大幅減少から水不足も心配されています。

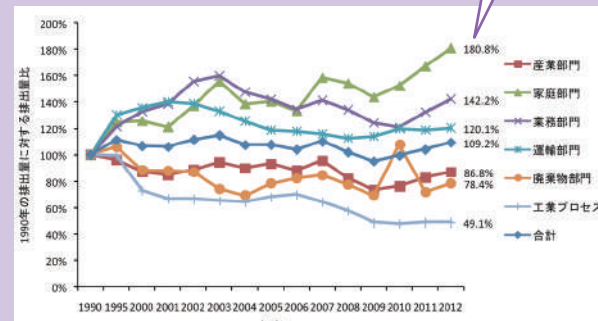


出典：埼玉県環境科学国際センター

●埼玉県の二酸化炭素排出量



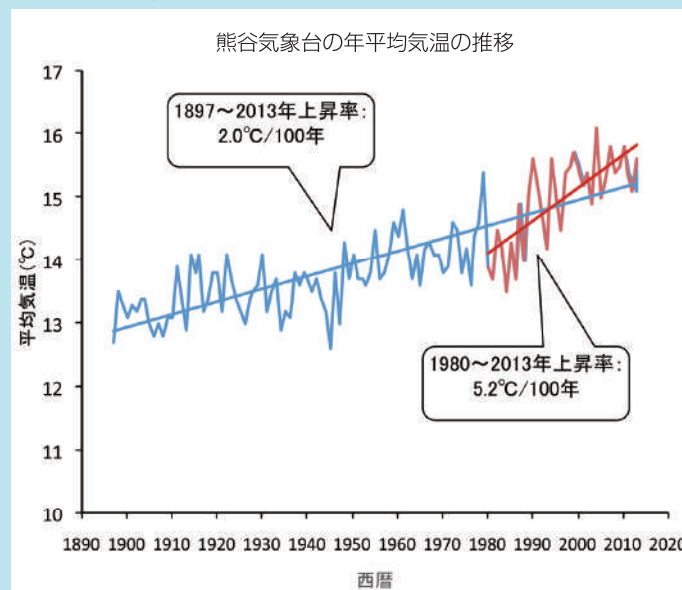
家庭部門の排出量が1990年比で約80%増加しています。



●夏の猛暑日が多くなっています

最近、埼玉県は夏の猛暑日の日数が多くなっています。温暖化の影響ばかりでなく、ヒートアイランドも起因しています。それにともない、熱中症の危険性も高まっています。

▼気温の上昇



出典：埼玉県環境科学国際センター

最高気温35℃以上の日は、1970年代から上昇傾向がみられます。また、38℃以上の日は、近年は平均すると年に数回程度出現するようになりました。

▼過去5年の猛暑日の日数

	2013年	2012年	2011年	2010年	2009年
熊谷	23	32	26	41	4
秩父	16	18	15	19	1
さいたま	20	19	18	33	1
寄居	18	23	20	25	2
久喜	15	18	19	35	2
鳩山	25	32	21	37	2
越谷	20	21	20	34	0
所沢	13	8	6	19	0

2010年は特に暑かった

